

シロチドリを守ろう

日本野鳥の会大阪支部

シロチドリは、大阪湾岸部でもかつては一年を通じ、海辺で比較的普通に見られるチドリでしたが、今はまれにしか姿を見ることができなくなるほど個体数が減っています。

海岸近くの砂浜で繁殖する鳥ですが、適地のない大阪では夢洲などの埋立地の裸地で少数が繁殖しています。営巣環境の保全・創出が大きな課題です。

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* (チドリ目チドリ科)

全長 17.5cm 留鳥として、海岸部の砂浜や干潟、埋め立て途上地などに生息する。

鳴き声:ピュルピュル、繁殖期にはケレケレケレという声やポイツという声も出す。

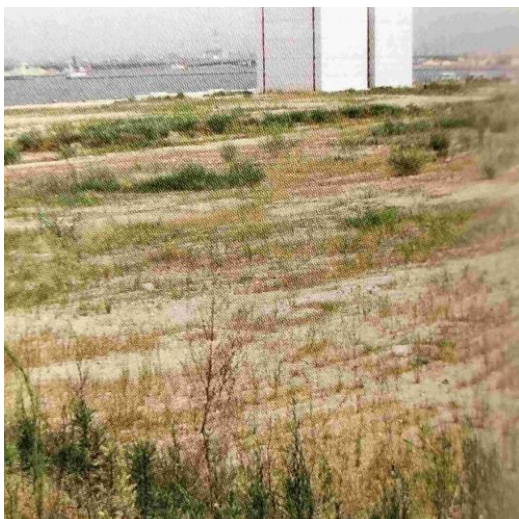
かつては、チドリのなかでは、一番数が多くよく観察できた鳥であるが、全国的に近年急激に減少しており、絶滅危惧Ⅱ類指定種（大阪府レッドリスト 2014 [osakafu-redlist2.xls](#)、環境省）となっている。



営巣場所

海岸の砂浜や大きな河川の中洲の砂礫地などの地上で繁殖するが、海岸部の埋め立てなどの影響で全国的に減少が著しい。自然の浜辺がほとんど残っていない大阪では、湾岸部の造成途中の埋立地でわずかに営巣しているにすぎない。巣をつくる場所はコアジサシのように炎天下の裸地ではなく、まばらに草の生えたところを選び、背の低い草の陰などに作られることが多い。

繁殖期は4~7月頃で、貝殻や小石など集めた簡素な巣を地面につくり、2~3卵を産む。



シロチドリの営巣環境



地上の巣と卵 保護色で発見は困難

繁殖生態

抱卵 雌雄交代で抱卵し、抱卵期間は 23-29 日

擬傷行動 親は巣に外敵が近づくと翼を広げて身を屈め傷ついた振り(擬傷)をして巣から離れ、外敵の注意を巣から反らす。

ヒナの成長 ヒナは孵化後すぐに歩くことができ巣の場所を離れる。親鳥について歩き、自分で餌をとって、孵化後およそ 3 週間で飛べるようになる。

配慮事項等

シロチドリは、コアシサシのように、集団営巣する鳥ではないため、巣の場所の特定が困難。卵は保護色であり、極めて発見は難しく、工事車両などの通行する場所の近くなどで営巣していても気づきにくい。

ヒナは卵からかえるとすぐに歩くことができ巣の場所を離れる。親鳥が警戒の声を上げると、そのまま地面に座り込む。ヒナも保護色であり、座り込んで動かずにいると鳥であると認識することは困難。

親鳥の擬傷行動が見られると、近くに巣やヒナがいるということがわかるので、そのエリアには一月程度、近づかないなどの配慮が必要。

巣やヒナが車で轢かれるという事故をふせぐためにも、親鳥の行動から、繁殖エリアを特定して、立ち入り禁止区域とするなどの配慮が必要。



シロチドリ ヒナ (5月)



シロチドリ幼鳥 (6月)

コチドリ *Charadrius dubius* (チドリ目チドリ科)

全長 16cm シロチドリよりやや小さい

繁殖期にはピッピピッピッと鳴きながら飛び回ること、シロチドリとの識別は容易。

河川敷の砂礫地や湾岸部の造成途中の埋立地などで繁殖。

シロチドリと同様、まばらに草の生えた地上に営巣する。

と卵だけで、シロチドリと判別するのは困難。

準絶滅危惧種(大阪府レッドリスト 2014)

繁殖が確認された場合は、シロチドリ同様の配慮が必要

